

実践報告

札幌市立光陽中学校

(1) 研究内容

研究課題：「アイヌ民族の方を学校に招いて行う体験的な学習に関する研究」

- アイヌ民族の文化が身近なものに存在することに気付き、関心を高める。
- 歴史の中で、アイヌ民族が受けてきた差別や貧困について理解する。
- 多様な文化が存在することを理解し、それらを継承していく態度を養う。

(2) 実践の内容

【実践①】「アイヌ文化体験までの学習」について

- ねらい
アイヌ民族の伝統、文化について理解し、それらを尊重するために法整備がされていることを理解する。
- 学習内容
 - ・ 地理的分野、歴史的分野で学んだ内容の整理を行い、アイヌ民族の存在や居住地域について再確認する。
 - ・ 公的分野において、アイヌ民族が受けた差別を題材に「平等権」の理解を深める。
 - ・ アイヌ文化がもつ特徴に興味をもち、それらが現在の北海道の文化とどのように結び付いているかを調べ、興味や関心を高める。

【実践②】「アイヌ文化体験」について

- ねらい
 - ・ アイヌ民族の文化を実際に体験することで、文化の多様性を理解し、尊重しようとする態度を養う。
 - ・ アイヌ文化に直接触れる実体験を今後の学習に活用する。
- 学習内容
 - ・ アイヌ民族の方々からの講話、器楽演奏や舞踊の鑑賞、ムックリ体験。
 - ・ アイヌ民族舞踊の「輪踊り」を生徒全員で参加して体験する。



(3) 研究のまとめ

① 成果

- 多くの生徒がアイヌ文化についての知識はあるが、見聞きする程度であるため、実際に体験することでの学習効果はとても高いものであった。生の音を聴き、実際に踊りを体験することで、遠い存在のように感じていた文化を身近なものだと感じる事ができた。
- 差別を受けてきた中でもアイヌ文化は存続しており、さらに今後、アイヌ文化を伝え続けなければいけないことに気付く事ができた。
- 今回のアイヌ文化体験を経て、異文化理解への関心が高まり、世界中に存在する多くの文化の共存について深く考える事ができた。

② 課題

- アイヌ民族の歴史や地政学の学習は1学年、2学年で行うが、限られた授業時数での実施であり、十分な学習ができていない。
- 文化についての学習が中心であったため、人権と国家、人権と政治に関する内容の学習を充実させることも必要であると感じた。
- アイヌ民族への人権侵害を入口とし、より身近な人権問題について考えられるような道徳や学級活動など全ての教育活動との連携を積極的に行うことが可能である。

③ 提言「人権教育のすすめ」

- アイヌ民族の文化を体験的に触れることで、異なる文化を学ぼうとする姿勢や異なる文化を尊重していく態度を養うことができ、その姿勢や態度が国際理解教育にもつながる。アイヌ民族が共存する環境だからこそのような人権教育が実施できるのであり、有効な教育資源として積極的に活用していくべきである。
- 歴史上にあったアイヌ民族への差別が今もなお存在していることや、世界中に存在する人種差別への問題意識を認識できるような取組にしていくことが求められる。
- 人権教育は、自己と他者の存在を認め、違いを認め合うことから始まるものであるから、互いを尊重し、理解し合う心や考え方の育みが必要である。

